

子どもの遊びを中心とした地域環境変化に関する分析*

An Analysis of the Changing Process of Regional Environment and Play of Children *

神谷大介**・野原歩***・岡本慶大****

By Daisuke KAMIYA**・Ayumi NOHARA***・Yoshihiro OKAMOTO

1. はじめに

「遊び」という活動が子どもの成長において非常に重要であることは、発達心理学等の多くの研究から明らかである^{1)~3)}。この中でも特に、屋外でのグループ遊びが重要である⁴⁾。しかし、子どもの遊び場は屋内へと変化してきており、その原因はテレビゲームの普及による影響が大きいと言われている。原因はこれだけであろうか。屋外の遊び場、すなわち地域環境の変化も影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

さらに、高度経済成長期以降の経済効率性を重視した都市開発および土地利用は身近な自然環境を喪失させてきた。この代償として、子どもの遊び場を供する等のために都市公園が整備されてきた。これは失われた自然環境を代替するものになりえているかという疑問点がある。

以上の問題意識の下、本研究は沖縄島を対象として環境変化を子どもの遊びという視点から評価することを目的とする。沖縄島には1972年の本土復帰以降、那覇市を中心に都市化が進行した地域、恩納村を中心にリゾート開発された地域、南城市のようにサトウキビ等のために土地改良がなされてきた地域がある。本研究ではこのような地域環境の変化が子どもにとって好ましいものであったか、さらには失われた遊び、新たに生まれてきた遊びの意味について考察する。このため、遊びの多様性と五感から、遊びの変化を評価するとともに、遊び場の変化を評価し、失われた遊びの重要性を論じる。そして、遊び空間計画において今後重要視しなければならない要件を明らかにすることとする。

2. 「遊び」の意義と遊び場の役割

子どもの遊びについて、IPA (International Play Association ; 子どもの遊ぶ権利のための国際協会) マルタ宣

*キーワード：環境計画、地域計画、土地利用

**正員、博(工)、琉球大学工学部環境建設工学科

(沖縄県中頭郡西原町千原1、

TEL098-895-8653、FAX098-895-8677)

***、学(工)、金秀リゾート(株)

****、学(工)、(株)キンレイ

言(1977年)では、遊びは、①栄養や健康や住まいや教育等が子どもの生活に欠かせないものであると同様に、子どもが生まれながらに持っている能力を伸ばすために不可欠である、②本能的なものであり、強いられるものではなく、ひとりですべて湧き出てくるものである、③子どもの体や心や感情や社会性を発達させる、④子どもが生きていくために必要な様々な能力を身につけるために不可欠なものである、等と述べている。以上より、遊びは自主的であり、心と身体の動きによって表現される活動であると言えよう。

また、同じ呼び名の遊びであっても、地方によって少しずつルールが異なっていることは多い。遊びはその場、その状況、さらには文化や風土の相違によってやり方が異なることがある。すなわち、遊びは周囲の環境によって大きく影響される活動であり、またこれは適応的かつ主体的なものである。そして遊び場は、子どもにとって不可欠な活動に対して、創造性を駆り立て、新たな遊びを生み出す空間である。一方、その空間の魅力がなくなれば、そこは子どもの遊びに利用されなくなったり、遊びの多様性が減少したりすると考えられる。すなわち、心と体の動きによって子どもの成長に対して重要な遊びから、地域環境およびその変化を評価することは、地域環境計画において重要な視点であるといえる。

3. 地域環境変化と分析の年代設定

本研究では地域環境と遊びの変化の関係を明らかにするため、ここではまず、1. で述べた3地域の土地利用変化を示す。具体的な対象地域は、那覇地区：那覇市・浦添市・宜野湾市、南城地区：南城市・八重瀬町、恩納地区：恩納村・名護市・本部町である。これら3地域の本土復帰前の1960年代、復帰後の1970年代、都市化・リゾート化されてきた1990年代の土地利用面積を図1に示す。これより、全ての地区において樹林地が減少し、那覇地区では市街地、南城地区では耕作地が増加していることが分かる。恩納地区においては、土地利用の変化があまり見られないが、1975年から2000年の間にリゾートホテルが17施設もできている。このほとんどがプライベートビーチを有しており、現地ヒアリング調査結果からも、

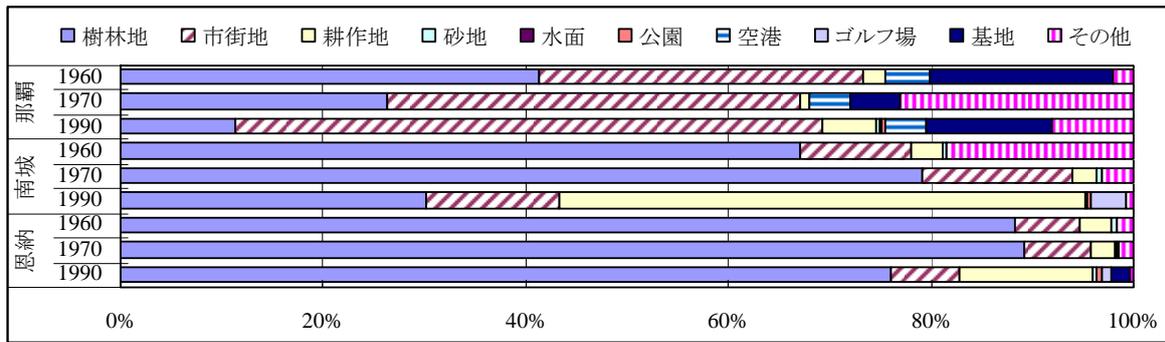


図1 土地利用変化

表1 年代の設定

グループ	生年	特徴
1	～1968	本土復帰前
2	1969～1986	観光化され始めたころ
3	1987～	TVゲームが普及

表2 サンプル数

グループ	那覇地区	南城地区	恩納地区
1	53	163	121
2	49	161	60
3	30	264	73
計	132	588	254

住民と海との心理的距離を遠くしてきたと理解できる。

以上の地域環境変化に加え、主な家庭用ゲーム機の発売年を考慮し、表1に示す年代別に遊びの変化を分析することとする。

4. 遊びの変化に関する分析

(1) アンケート調査の概要

子どもの頃に行った、もしくは今の子どもが行っている遊びについて、①遊びの名前と遊び方、②誰と、③どこで、④何を使って、行ったかを直接面談と小・中学校への留置により調査した。まず、2006年8月からプレ調査を行い、同年10月から2007年9月まで、直接面談方式により、沖縄で行われていた遊びやその頃のその場所の状況を聞き取り、375サンプルを得た。これで沖縄の遊びについて把握した後、2007年10月から12月に5つの小中学校で留置調査を行い、現在の子どものおおよびその父兄から612サンプルを得た。地域別年代別のサンプル数を表2に示す。なお、本研究では沖縄県の特徴的な変化を考慮し、恩納地区と南城地区を中心に調査を行った。

(2) 分析の考え方

遊びの変化を分析するにあたり、本研究では地区別、場所別に「サンプル数」、「遊びの数」、「遊びの種類」という3つの評価軸を設定した。これら用語の意味を表3の例で説明する。サンプル数とは回答者の数であり、例では2サンプル(A,B)である。これは子どもに人気のある遊び場がどこか、遊びからみて魅力的な場所ほど

表3 本研究で用いる用語の例

回答者	遊びの名称	回答者	遊びの名称
A	a	B	a
	b		c
	c		d

表4 遊び場の種類

海、川、山・樹林地、田畑、道路、空地・広場、公園、学校、屋内・家、その他(基地、駐車場、どこでも、等)

こか、という評価軸になる。遊びの数とは、その場所で行われた遊びの延べ数であり、例の場合6(a,b,c,a,c,d)となる。これは利用者が多くかつ多様な遊びに供される場所であるかを表現する評価軸である。遊びの種類は重複を含まない遊びの数であり、例では4(a,b,c,d)となる。これは遊びの多様性を表現した指標であり、遊び場からみれば様々な遊びに使われる潜在能力を有しているとも考えることもできる。

(3) 分析結果とその考察

a) サンプル数の分析

地区別場所別のサンプル数の変化を図2～4に示す。なお、この結果は年代別に得られた回答者数が異なるため、100人に換算した値を示している。これらより、海や川、山・樹林地といった自然の中や空地・広場等を含めた屋外での遊びが減少し、公園、学校、屋内・家が増加している。地区別には、那覇地区で学校と屋内が80人以上と非常に多く、一方、これ以外は全て40人以下である。特に、山・樹林地と田畑で遊んだ経験のある子どもは全くなくなった。南城地区では、公園、学校、屋内が増加し、その他は減少している。耕作地が増加した地区であるが、田畑での遊びが無くなった。この理由は、アンケートで「田畑での遊びはお手伝いの間に行った」という回答があり、日常的な生活スタイルが変わったことが影響を及ぼしていると考えられる。また、土地改良によって用水路がコンクリートで整備された事により、昆虫等が減少し、子どもにとって魅力的でなくなったためであろう。恩納地区において他地区との相違点は海での遊びが多いことである。これは海が近い結果だと考えられる。

b) 遊びの数の分析

地域別・場所別・年代別の遊びの数の変化を図5～7に

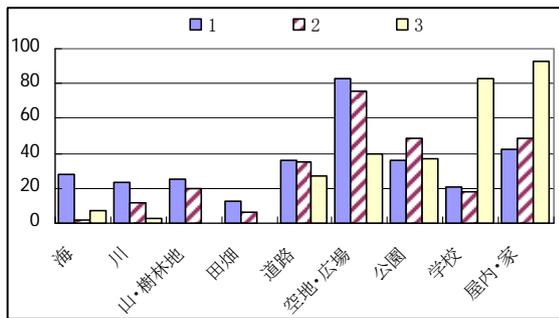


図2 サンプル数の変化 (那覇地区)

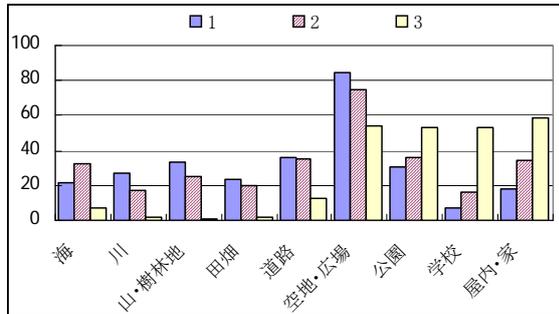


図3 サンプル数の変化 (南城地区)

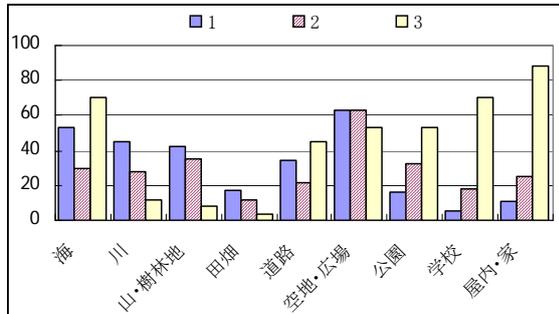


図4 サンプル数の変化 (恩納地区)

示す。これらより、学校と屋内・家で遊びの数は増加し、その他は減少若しくは変化なしという傾向がある。また、サンプル数の減少以上に遊びの数が減少しているものが多い。特に恩納地区の海での遊びは年代1より年代3の方がサンプル数（100人中何人が海で遊んでいるか）は増加しているにもかかわらず、遊びの数は半分以下になっている。これは海で行われる遊びの種類が減少していることを意味する。また、都市化が進んだ那覇地区の年代3では、他の地区より学校や屋内・家が多く遊びに利用される場になっており、屋外での遊びの数の合計が屋内・家よりも少なくなっている。他の地区ではここまで遊び場が屋内に偏っておらず、都市化が子どもの外での遊び場を奪ってきたと推測される。

南城地区では、屋内・家と空地や公園が同程度の遊びの数がああり、都市化しなかった地区の方が子どもは外で遊んでいることが分かる。屋内での遊びの多くは1人で行い、また体の動きを伴わないことが多い。遊びは「心と身体の動き」であり、友達などと遊ぶことにより社会性を養う活動であるため重要であり、屋内での遊びは遊びの意義や役割を果たしていないと考えられる。また、

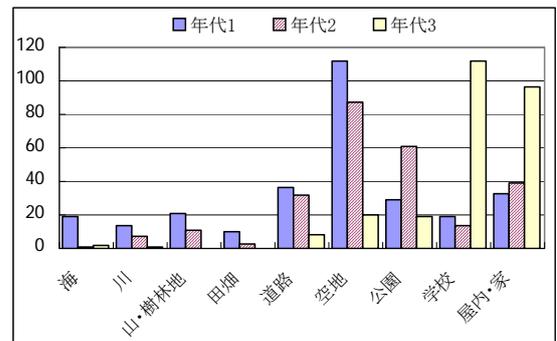


図5 遊びの数の変化 (那覇地区)

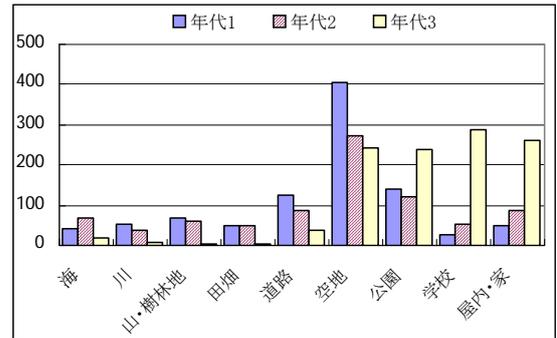


図6 遊びの数の変化 (南城地区)

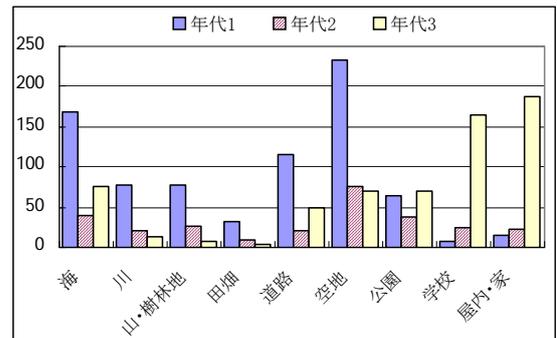


図7 遊びの数の変化 (恩納地区)

表5 五感からみた場所・年代別の遊び

場所	年代1		年代2		年代3	
	最高	平均	最高	平均	最高	平均
海	8	4.5	8	4.7	8	4.4
川	8	4.3	8	4.7	7	4.5
山・樹林地	8	4.3	8	4.6	8	5.1
田畑	8	4.4	8	4.6	6	4.8
道路	7	3.9	8	4.3	8	3.8
空地	8	3.6	8	4.2	6	3.6
公園	8	3.9	8	3.7	8	3.6
学校	7	3.8	8	3.7	8	3.3
屋内・家	7	3.9	8	3.9	8	3.2
全体	8	3.7	8	3.4	8	3.3

テレビゲーム等の影響は、同年代の地区間で比較すれば取り除くことができると考えられ、この結果は地域環境の違いが生み出した遊びへの影響だと見ることができる。

c)遊びの種類の分析

那覇地区では学校、屋内・家で遊びの種類が増加し、その他は減少している。南城地区と恩納地区では学校、屋内・家と同程度公園や空地でも多様な遊びが行われている。恩納地区では、海で遊ぶ子どもの割合（サンプル

表6 地域・場所別の失われた遊びと新しい遊び

地区	場所	失われた遊び	新しい遊び
南 城 地 区	海	魚捕り	けいどろ、バレーボール
	川	泳ぐ	カードゲーム
	山・樹林	虫を捕る	—
	田畑	芋掘り、生き物を捕る	カードゲーム
	道路	メンコ、ビー玉	ドッジボール、散歩
	空地	生き物を捕る	ドッジボール、ドン
	公園	縄跳び、ビー玉、ゴム段	ドッジボール、ドン
	学校	石蹴り	ドッジボール、サッカー
恩 納 地 区	屋内・家	—	TVゲーム、絵を描く
	海	魚捕り	バーベキュー
	川	魚捕り、生き物食べる	—
	山・樹林	生き物食べる、木の実を採る	基地づくり、自転車に乗る
	田畑	探検	かくれんぼ
	道路	メンコ、野球	キックボード
	空地	石蹴り、ゴム段	サッカー、木登り
	公園	ビー玉	虫を捕る、木登り
	学校	—	木登り、ドッジボール
	屋内・家	お手伝い	TVゲーム、パソコン

数)は変わらないものの、遊びの種類は大きく減少している。このことは、子どもの遊びからみた海の潜在能力が減少してきたと考えられる。遊びの多様性からみれば、屋外は子どもにとって魅力的な場所でなくなってきたといえる。このことは、地域環境が有している遊びに対する能力が低下してきたと考えることができる。また、年代毎の1人あたりの遊びの種類をみると、年代1は0.75、年代2は0.68、年代3は0.58と年々減少している。遊びが創造的な活動であるという点から考えれば、遊びが単純化してきていることがわかる。

(4)五感からみた遊びの変化

本研究の調査では、直接面談で遊びの名前を聞いており、その時どのような遊びであったのかを聞いている。これをもとに、それぞれの遊びに対して、五感との関係を3段階で関係づけた。具体的には、欠くことができない感覚に2点、ある方が好ましい感覚に1点、遊びに関係のない感覚に0点を付けて整理を行った。この結果を表5に示す。これより、海、川、山、田畑での遊びは多くの五感を使って遊んでいるのに対し、屋内・家での遊びはあまり使っておらず、さらに、五感をあまり使わなくなってきたことも分かる。多くの感覚を使って遊ぶということは、子どもの感性を養うために重要な要因であり、遊びの言葉の意味として「心の動き」を表現する1つでもある。また、海、山、川といった自然の中での遊びに対し、公園での遊びはそこまで感覚を使っておらず、五感から見たとき、公園は自然の中での遊びを補い切れていないことが分かる。

(5)遊びの変化と遊び空間計画に関する考察

ここでは本土復帰前から現在までの遊びの変化をより具体的に示し、その意味を考察する。失われた遊びと新たな遊びを表6に示す。紙面の都合上南城・恩納地区を示す。これより、「何かをとる」や「何かを食べる」という遊びがなくなり球技やテレビゲームが新たに行われるようになった。また、海でのバレーボールや川でのカードゲーム等、その場とは関係のない遊びが増えている。このことは与えられた遊び(ルールが決まったスポーツ等)が増加し、自ら遊びを創造することがなくなってきていることを意味する。この原因には、ビーチがプライベート化され、遊泳区域にネットが張られていること、護岸整備や生活排水の影響等々で、海が破壊・汚染され、生物が減少したことが影響していると考えられる。この結果、海が子どもにとって魅力的な場所ではなくなってきたと考えられる。

さらに、何かをとって食べるという遊びは公園では行われていない。しばしば、人口当たりの公園面積等で遊び空間計画が評価されることがあるが、遊びとは何か?何故遊びが重要か?を考えたとき、遊び場は量だけではなく、遊びという活動から見た空間の質が考慮されなければならない。そして、子どもの感性を養うような、五感を使って遊ぶことのできる空間が必要であるといえる。

5. おわりに

本研究では、沖縄島において本土復帰以降3様の変化を遂げた地区を対象に、子どもの遊びという視点から地域環境の変化について分析・考察を行った。さらに、今後の遊び空間計画においては、生き物との触れあいを創出する事が重要であること、これを含めて子どもの感性を刺激するような仕組みが必要であることを示した。しかし、本研究では遊びの多様性や五感との関係で論を展開したが、個々の遊びが何を楽しんでいるかについて考察できていない。今後はこれを含め、遊び空間の質の配置計画について研究を行うこととする。

最後に、本研究の調査において、恩納村立山田小中学校、同恩納小中学校、南城市立玉城小学校、同知念小学校、八重瀬町立具志頭小学校の皆様のご協力を得ました。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) エリコニン：遊びの心理学、新読書社、2002
- 2) J・ピアジェ・E・H・エリクソン他：遊びと発達の心理学、黎明書房、2000
- 3) M・J・エリス：人間はなぜ遊ぶか、2000
- 4) 仙田満：こどもの遊び環境、筑摩書房、1984